

シャドウ・ライン

……平常は大鏡の如く静けく、平らかにして
我が心の絶望を映し出す。

ボードレール

第1章

そのような瞬間があるのは若者だけだ。私はここで
はごく年少の者を意味してはいない。いや、少年につ
いては、正確に言えば瞬間などというものはない。少
年期の特権はその時代に先駆けて、休止や内省などを
知らぬ見事なまでに連続した希望のうちに生きること
なのだ。

彼はただの少年らしさという小さな門を通り抜けて
閉めてしまう。そして魅惑に満ちた庭に入る。そこ
では影ですら期待に満ちて光を放っている。道の曲が
り角の一つ一つに独自の誘惑がある。それは未知の国

だからではない。彼は全ての人間が流れをなしてその
道を通って行ったことを知り抜いている。その魅力は
万人に共通の体験から、普通でない、あるいは独自の
わずかながら自分だけの 感動を期待すること
にあるのだ。

彼は先人たちの残した標識を見きわめつつ歩き続け
る 尽きせぬ興奮と感興をもって不運、幸運を分か
たず（お金を貰うどころか足蹴にあうという言葉があ
るが、お金も足蹴も）取り込みながら進んで行く
そこは、それに値する者あるいは多分、幸運な者には
無数の可能性が秘められている、絵のように美しい共
通の地所なのだ。こうして彼は歩み続ける。そして時
も過ぎて行く やがて彼は前方に陰影線を目にする。
それは、ここで青春時代の領域もやはり後にしなけれ
ばならないという警告の境界線なのである。

私が先に述べたような瞬間が訪れることが多いのが
この時期である。何の瞬間かだつて？ むろん、退屈
倦怠、あるいは不満の瞬間である。軽率な瞬間である。
私が言う意味はまだ若い者が向こう見ずな行動 例
えば突然結婚したりあるいは理由もなく職を辞めるよ
うな に走りがちな瞬間のことだ。

これは結婚の物語ではない。私のそれはそれほど悪

いものではなかった。私の行動は、軽はずみといって、もつと離婚に近い性格を帯びており、殆ど遺棄といつてよいものだった。分別ある人間が指し示すことができたような理由もなく、私は仕事をなげうってしまった。つまり、高級船員としての地位を放棄し、船を去ってしまったのだ。その船について言い得る最大の不満といえは、せいぜい、蒸気船であることによつて、あの、言わば、盲目的な忠誠を受けるには値しないと……しかし、私自身そのとき気まぐれではないかと思つていた行為に、もつともらしい口実を見つけてよとするのは無駄なことだ。

その船はある東洋の港に停泊していた。当時その港に属していたという意味でそれは東洋の船だった。暗礁の多い青い海に点在する、黒ずんだ島々の間で交易に従事する商船で、船尾甲板の手すりには赤い英国商船旗が掲げられ、マストの先端の船主旗は同じく赤色だが、縁は緑色で、中に白い三日月形（訳注「イスラムの象徴」）がある。所有者はアラブ人で、しかもサイド（訳注「サイドはモハメットの四女ファティマの子孫を意味する、男子への尊称」）だった。

それが旗に緑色の縁がある理由だった。彼は壮大な海峡アラブ人会館のかしらだったが、スエズ運河より海峽がお気に召す内部推進機構がなかったとすれば、私は今日にいたるまでその船を深い敬意とともに思い起こしていたに違いないのだ。船が携わっていた取引の種類と、乗組員仲間の性格について言えば、もし海員生活と仲間たちを私の注文通り情け深い魔法使いに作つてもらえたとしても、私の幸せはこれ以上ではなかっただろう。

そして私は突然これら全てを捨ててしまったのである。鳥が心地よい枝から飛び去るように、我々にとつて筋の通らない形で捨て去ってしまったのだ。まるで、全く無意識のうちに私はあるささやきを聞いたか、あるいは何かを見たかのようにだった。いや、恐らくそうだったのだろう。ある日私は完全に満ち足りていたのだが、その翌日には、何もかもなくなつてしまったのだ。魅惑も、味わいも、興味も、満足感も

あらゆるものが、これをご承知のような、あの瞬間の一つだったのだ。青年後期の未熟からくる病が私を襲つて、私を押し流してしまつたのである。つまり、その船から流し出してしまつたのだ。

東に限れば、複合した大英帝国の最も忠実な臣民だった。彼は国際政治に心を煩わせることは全くなかったが、アラブ人の間では強大な神通力を保っていた。私達にとつては船の所有者が誰であると同じことだった。彼は自分の営む事業の中で船積みについては白人を雇う必要があつたが、そうして彼が雇つた者の多くは仕事の初日から最終日にいたるまで彼の姿を目にするとはなかった。私自身、彼を見かけたのは一回だけだった。それも思いがけなく埠頭で出会つたのだった。色の浅黒い小柄な、片目の老人で、純白のローブをまとい、黄色のスリッパをはいていた。食物と金で恩恵を施した一群のマレー人の巡礼たちから、手に熱烈な接吻を受けているところだった。私が耳にしたところでは、彼の慈善行為はきわめて広範囲にわたつていて、ほとんど群島全体に及ぶとのことだった。そういうえば、「仁愛の心ある者はアラブの友なり」と言われているのではないが。

氣を使う必要のない、優れた（そして、異彩を放つ）アラブ人のオーナー、そして最高に素晴らしいスコットランド船。なぜならそれは竜骨からマストの先端にいたるまでスコットランド産だった。清潔に保ち易く、あらゆる面で扱い易い優秀な外洋航船で、もしのかがといぶかるようにまじまじと私の顔を見つめた。しかし彼は船乗りで、やはり若い時期も経てきた男だった。しばらくすると彼の濃い、鉄灰色の口ひげの陰から微笑が浮かんできた。そして彼は、もちろん、もしお前さんがどうしても辞めようと思つたのなら力づくで引き止めることはできないと言つた。そして翌日に私に給料を払つて解雇すべく手はずを整えられた。私が海図室から出ようとすると、彼は突然、普段と違う、物思わしげな口調で付け加えた。君が辞めてまで探し求めようとするものが見つかることを希望すると、穏やかで簡潔な言葉だったが、ダイヤモンドのように固いどんな工具よりも深いところまで届くように思われた。彼は私の言い分を理解してくれたのだと私は信じている。

しかし二等機関士の態度はそれと異なり攻撃的だった。彼は頑丈な若いスコットランド人で、すべすべした顔と淡い色の目を持っていた。彼の実直らしい赤ら顔が機関室の仲間の間から浮かび出たかと思うとたくましい体全体が現れた。シャツの袖を捲り上げ、がっしりした前腕を締くずのかたまりでゆっくりと拭つている。彼の目は、私たちの友情が台無しになつたというような、激しい嫌悪感を表していた。重苦しい口調

で彼は言った。「おつ、そうか！俺はそろそろ、あんなに国に帰ってどっかの間抜けな娘と結婚する頃だと思っていたよ。」

ジョン・ニーヴンがすさまじい女嫌いだということとは港では暗黙のうちには知れ渡っていた。彼の当てこすりの愚劣さから、私は彼が本気で嫌味を言っているのだと確信した。悪意をむき出しにして、思いつくことが出来る最も痛烈な言葉を浴びせかけているのだ。私の笑いは弁解がましく響いた。これほど激しく怒ることが出来るのは友人以外ありえなかった。私はいささか意気消沈してしまった。一等機関士も私の行動を独特の見方で受け取ったが、もう少し同情的だった。

彼も若かったが、非常にやせていて、かすみのようにふわふわした茶色のひげがやせこけた顔の周り一面に密生していた。海上であれ入港中であれ、彼が終日後甲板を行ったり来たりせかせかと歩いているのが見られた。そんなときは精神的に没我の境にあるような一途な表情を浮かべていたが、それは身体内部の営みから引き起こされた不快な感覚をたえず意識しているためだった。というのは、彼は慢性の消化不良に悩んでいたからだ。私の事件に対する彼の見方は非常に簡単なものだった。肝臓の変調のせいに決まっていると

で、網戸を透した陽光が穏やかに一面を照らしていた。その中にいる人々、職員も一般の人々も、は皆、白一色の身なりをしていた。中央の通路に沿って並んでいる、磨き上げられた、ずっしりした机だけがほの暗く光沢を帯びており、それらの上に置かれている書類は青かった。いくつかの巨大なパンカー（訳注「天井から吊るした布製の扇で、人手または機械で動かす」）が頭上高くから穏やかな風をこの清潔感ただよふ室内に送り込んでいて、私たちの汗ばんだ頭を冷やした。

私たちが近づいた机の後ろに腰掛けていた職員は歯を見せて愛想良い笑みを絶やさず、「契約を一旦終了して、更新するわけですな」と通り一遍の質問をした。これに船長が「いや、これできつぱりと契約解消ということですよ」と答えると職員の笑みは消えて、真面目くさった顔つきになった。それ以後、あたかも死者の国への旅券であるかのように悲しげな表情で書類を私に手渡すまで、彼は一度も私の顔を見なかった。

私が書類をしまい込んでいるあいだ、彼は小声で何か船長に尋ねていて、これに船長が機嫌よく答えるのが聞こえた。

「そうじゃない。彼は郷里に帰るために辞めるので

いつのだ。もちろんだとも！彼は、私が次の航海を終えるまではとどまって、その間、彼が揺るぎない信頼を置いている、ある売薬を飲むべきだと勧めた。「俺の目論見を言ってやろう。あなたに二瓶買ってやるよ。自腹を切った。これほど真つ当なことはないだろう、ええ？」

私が軟化したようなしるしをわずかも見せたら、彼はこの非道な行為（あるいは、気前よさ）を実行に移していたに違いない。しかしその時、胸中の不満、嫌悪感はいずれまでもないほど高まっており、私は以前にも増して頑なになっていた。新奇で多様な経験に満ちた過去の一年半が、わびしく、無味乾燥な、無駄に過ごされた日々のように思われた。私は、なんと表現したらよいだろうか？ そのような月日から、真実を見出すことなど出来はしないという気がしていたのである。

何の真実か？ そう問われれば私は説明に窮しただろう。もし強いて説明を求められれば多分わつと泣き出しただろう。それも不思議ではないほど私は若かったのである。

翌日、船長と私は港湾事務所でも事務手続きの処理を行った。そこは天井の高い、白く大きな、涼しい部屋だ。私と職員は私の嘆かわしい状況を哀れむようにうなずきながら叫んだ。

私はこの職員と事務所以外で見知ってはいなかったのだが、彼は机の上に身を乗り出すと、いかにも同情したふう私の手を握った。それはまるで絞首のために引き出された哀れな奴に対するようだった。一方、私は悔い改めない犯罪者のように頑なな態度で終始無作法に振舞ったようだ。

帰航の途につく郵便船の予定は三、四日なかった。いまや抛り所とする船はなく、そして当分海とのつながりを絶ってしまつて、事実、ただの旅客にしかなれない身になって、私は恐らく、ホテルに泊まりに行つた方が適切だったのだろう。しかも港湾事務所からほんの目と鼻の先にホテルがあったのだ。高い建物ではないが、どこもなく豪華で、こぎれいな芝生に囲まれ、柱に支えられた白い張り出しがいくつも見えていた。そこに宿泊したとすれば、まさに旅客という気分になったことだろう！ 私はホテルをひと睨みしてから、船員宿舎の方向へと歩みを移した。

私は直射する日光をものともせず歩き、あるいは遊歩道の大きな木々の陰を、少しも楽しむことなく歩い